

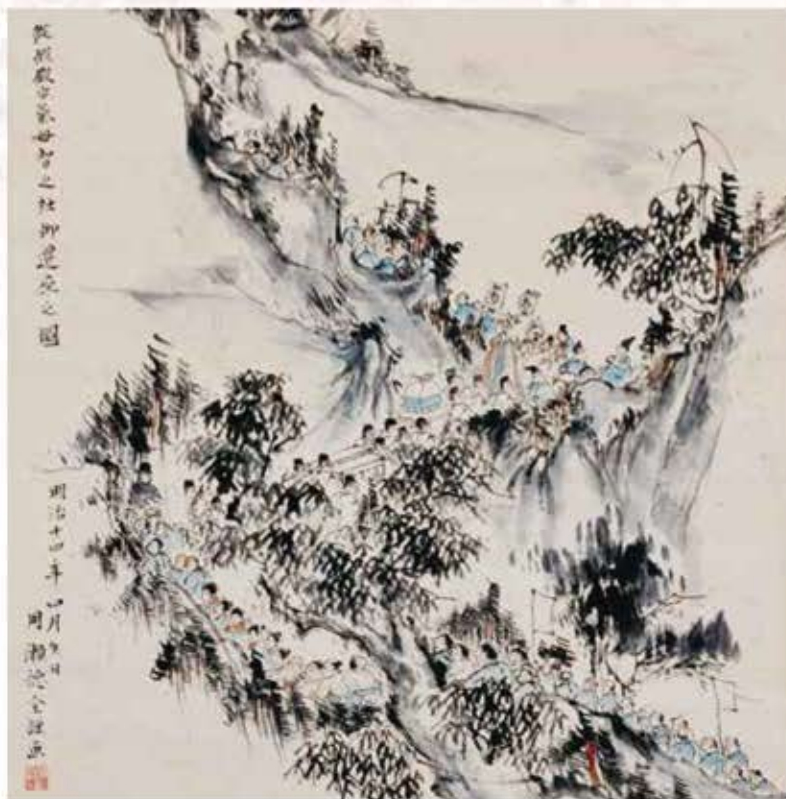
圓覚寺 護持会会報

# 文 殊

平成27年 新春号

從仮殿宇気母知之社遷座の図 (部分)

絵筆者…用瀬徳全(旧侍)  
寄贈者…関三歳殿



宇気母知之の社とは御霊神社のことで、福知山藩主として最後の殿様となった為綱公。廃藩となった福知山の旧侍と町人が、睦まじく暮らしていつて欲しいという願望で、私費にて朝暉神社(朽木家初代祀)を城跡に移築されました。一時、御霊神社に預けられていたご神体を、遷宮する時の様子を描いたもの。行列には相撲取りや芸者の姿も描かれ当時の様子がよく分かります。(圓覚寺蔵)

真理とは

「真理」とは茶筒のようなもの

縦に切れば長方形

横に切れば丸

斜めに切ればひし形

切り口の違いで争わないこと

平成27年

## 第4号

平成27年度の主な行持予定

- 1月 1日(木) 修証会 (元朝互礼会) 10時・11時の2回
- 12日(月) 大般若法要 (大般若經六百卷の転読祈願法要)
- 2月 15日(日) 涅槃会 (お釈迦様ご命日)
- 3月 (日程調整中) 西国三十三ヶ所巡拝
- 3月 18日 (日程調整中) 圓覚寺彼岸会 (彼岸入り)
- (日程調整中) 護持会決算・予算会
- 4月 29日(水) 和敬会花祭り (土師新町南区にて)
- 5月 8日(金) 圓覚寺花まつり (釈尊降誕会)
- 5月 28日(木) 梅花流全国大会 (横浜国立アリーナ)
- 7月 4日(土) 仏教文化大講演会 (厚生会館)
- 子供禅の集い (中丹地区)
- 7月末～8月初旬 遠方欄経
- 7月 26日 (日程調整中) 圓覚寺境内作務 (役員・会員他)
- 8月 1日(土) 土師観音盆供養・夜施餓鬼 (施食会連夜)
- 2日 (日程調整中) 土師墓地・檀信徒お墓掃除 (一軒に一人)
- 6日(木) 8:15 原爆追悼平和の鐘 (参加自由)
- 8月 8日(土) 孟蘭盆大施食会 (並ニ、初盆大施食会)
- 9日(日) 綾部(早朝)・夕陽丘・羽合・新庄・岩井・野花方面欄経
- 10日(月) 前田方面(早朝)・市内方面欄経
- 11日(火) 土師宮町区・土師新町東区欄経
- 12日(水) 土師新町南区欄経
- 13日(木) 土師町区欄経
- 14日(金) 孟蘭盆 (お盆参り、午前中本堂開放)
- 16日(日) 丹波大文字送り火
- 8月 22日 (日程調整中) 地藏盆参り (遠方)
- 8月 日 (日程調整中) 地藏盆 (土師新町南、地藏堂)
- 9月 20日 (日程調整中) 圓覚寺彼岸会 (彼岸入)
- 9月 21日 (日程調整中) 彼岸参り (遠方)
- 11月 日 (日程調整中) 秋の西国三十三ヶ所巡拝
- 土師総区戦没者追悼慰霊祭 (日時未定)
- 12月 8日(火) 釈尊成道会、未修年忌供養等併修
- 17日(木) 大すす払い
- 31日(木) 除夜の鐘・歳末圓経

- 毎月1日午前6時半 談経会 (朝のお勤め会)
- 毎月第1・3金曜日 梅花講詠讃歌 (日時変)
- 毎月第1・3木曜日 梅花講詠讃歌 (新講員、日時変)
- 毎月第2・4火曜日 午前10時 寿会写経会 (日時変)

圓覚寺護持会役員紹介

任期	平成二十四年四月～ 平成二十七年三月まで					
総代 (敬称略)	芦田 正勝	伊東 高志	佐藤 倅志	伊東 康雄	伊東 光二	芦田 満
代表総代	芦田 正勝	伊東 高志	佐藤 倅志	伊東 康雄	伊東 光二	芦田 満
総務担当	伊東 高志	伊東 康雄	伊東 光二	伊東 満	伊東 満	伊東 満
墓地管理者	伊東 高志	伊東 康雄	伊東 光二	伊東 満	伊東 満	伊東 満
会計担当	伊東 高志	伊東 康雄	伊東 光二	伊東 満	伊東 満	伊東 満
会計監査	伊東 高志	伊東 康雄	伊東 光二	伊東 満	伊東 満	伊東 満
会計監査	伊東 高志	伊東 康雄	伊東 光二	伊東 満	伊東 満	伊東 満

運営委員	高橋 正行	芦田 光二	高橋 秀樹	高橋 昌宏	高橋 哲治	高橋 典夫	高橋 俊明	高橋 輝彦	高橋 重夫	高橋 俊昭	高橋 修司	高橋 昭男	高橋 満智恵子	高橋 敏昭
第一班	高橋 正行	芦田 光二	高橋 秀樹	高橋 昌宏	高橋 哲治	高橋 典夫	高橋 俊明	高橋 輝彦	高橋 重夫	高橋 俊昭	高橋 修司	高橋 昭男	高橋 満智恵子	高橋 敏昭
第二班	高橋 正行	芦田 光二	高橋 秀樹	高橋 昌宏	高橋 哲治	高橋 典夫	高橋 俊明	高橋 輝彦	高橋 重夫	高橋 俊昭	高橋 修司	高橋 昭男	高橋 満智恵子	高橋 敏昭
第三班	高橋 正行	芦田 光二	高橋 秀樹	高橋 昌宏	高橋 哲治	高橋 典夫	高橋 俊明	高橋 輝彦	高橋 重夫	高橋 俊昭	高橋 修司	高橋 昭男	高橋 満智恵子	高橋 敏昭
第四班	高橋 正行	芦田 光二	高橋 秀樹	高橋 昌宏	高橋 哲治	高橋 典夫	高橋 俊明	高橋 輝彦	高橋 重夫	高橋 俊昭	高橋 修司	高橋 昭男	高橋 満智恵子	高橋 敏昭
第五班	高橋 正行	芦田 光二	高橋 秀樹	高橋 昌宏	高橋 哲治	高橋 典夫	高橋 俊明	高橋 輝彦	高橋 重夫	高橋 俊昭	高橋 修司	高橋 昭男	高橋 満智恵子	高橋 敏昭
第六班	高橋 正行	芦田 光二	高橋 秀樹	高橋 昌宏	高橋 哲治	高橋 典夫	高橋 俊明	高橋 輝彦	高橋 重夫	高橋 俊昭	高橋 修司	高橋 昭男	高橋 満智恵子	高橋 敏昭
第七班	高橋 正行	芦田 光二	高橋 秀樹	高橋 昌宏	高橋 哲治	高橋 典夫	高橋 俊明	高橋 輝彦	高橋 重夫	高橋 俊昭	高橋 修司	高橋 昭男	高橋 満智恵子	高橋 敏昭
第八班	高橋 正行	芦田 光二	高橋 秀樹	高橋 昌宏	高橋 哲治	高橋 典夫	高橋 俊明	高橋 輝彦	高橋 重夫	高橋 俊昭	高橋 修司	高橋 昭男	高橋 満智恵子	高橋 敏昭
第九班	高橋 正行	芦田 光二	高橋 秀樹	高橋 昌宏	高橋 哲治	高橋 典夫	高橋 俊明	高橋 輝彦	高橋 重夫	高橋 俊昭	高橋 修司	高橋 昭男	高橋 満智恵子	高橋 敏昭
第十班	高橋 正行	芦田 光二	高橋 秀樹	高橋 昌宏	高橋 哲治	高橋 典夫	高橋 俊明	高橋 輝彦	高橋 重夫	高橋 俊昭	高橋 修司	高橋 昭男	高橋 満智恵子	高橋 敏昭
第十一班	高橋 正行	芦田 光二	高橋 秀樹	高橋 昌宏	高橋 哲治	高橋 典夫	高橋 俊明	高橋 輝彦	高橋 重夫	高橋 俊昭	高橋 修司	高橋 昭男	高橋 満智恵子	高橋 敏昭
第十二班	高橋 正行	芦田 光二	高橋 秀樹	高橋 昌宏	高橋 哲治	高橋 典夫	高橋 俊明	高橋 輝彦	高橋 重夫	高橋 俊昭	高橋 修司	高橋 昭男	高橋 満智恵子	高橋 敏昭
第十三班	高橋 正行	芦田 光二	高橋 秀樹	高橋 昌宏	高橋 哲治	高橋 典夫	高橋 俊明	高橋 輝彦	高橋 重夫	高橋 俊昭	高橋 修司	高橋 昭男	高橋 満智恵子	高橋 敏昭
第十四班	高橋 正行	芦田 光二	高橋 秀樹	高橋 昌宏	高橋 哲治	高橋 典夫	高橋 俊明	高橋 輝彦	高橋 重夫	高橋 俊昭	高橋 修司	高橋 昭男	高橋 満智恵子	高橋 敏昭
第十五班	高橋 正行	芦田 光二	高橋 秀樹	高橋 昌宏	高橋 哲治	高橋 典夫	高橋 俊明	高橋 輝彦	高橋 重夫	高橋 俊昭	高橋 修司	高橋 昭男	高橋 満智恵子	高橋 敏昭
第十六班	高橋 正行	芦田 光二	高橋 秀樹	高橋 昌宏	高橋 哲治	高橋 典夫	高橋 俊明	高橋 輝彦	高橋 重夫	高橋 俊昭	高橋 修司	高橋 昭男	高橋 満智恵子	高橋 敏昭
第十七班	高橋 正行	芦田 光二	高橋 秀樹	高橋 昌宏	高橋 哲治	高橋 典夫	高橋 俊明	高橋 輝彦	高橋 重夫	高橋 俊昭	高橋 修司	高橋 昭男	高橋 満智恵子	高橋 敏昭

平成二十七年年度年回表

一周忌	平成二十六年没(二〇一四年)
三回忌	平成二十五年没(二〇一三年)
七回忌	平成二十一年没(二〇〇九年)
十三回忌	平成十五年没(二〇〇三年)
十七回忌	平成十一年没(一九九九年)
二十五回忌	平成三年没(一九九一年)
三十三回忌	昭和五十八年没(一九八三年)
五十回忌	昭和四十一年没(一九六六年)
百回忌	大正五年没(一九一六年)

【編集後記】

十一月に入れば年初に発行する「文殊」の編集準備に入りますが、原稿集めに一苦勞しています。和尚さんと四名の総代で試行錯誤しながら編集するわけですが、必然的に和尙さんに原稿依頼の比重が大きくなっていくので心苦しく思っております。地区内、地区外にお住まいの檀家の皆様もどんなことでも結構ですので寄稿していただければ大変ありがたいですが……。

昨年、色々な出来事がありました。明るい事といえば二月に和尙さんの徒弟である宗寛氏が本山永平寺に上山し一生懸命修行をしていることや暮れには圓覚寺歴代和尙の墓地改修が出来たこと等ですが、また暗い事といえば圓覚寺裏山側面のがけ崩れです。ただ人や、建物に被害がなかったことが不幸中の幸でした。今は仮処置をしています。今年には本格修復をしたいと思っています。費用も相当かかりますが、菩提寺を護っていくのも檀家の役目の一つかと思えます。ご無理を言います。ご理解の程、よろしく御願いたします。

総務担当  
伊東 高志

発行所

圓覚寺護持会会報編集部  
住所/京都府福知山市字土師一七七七  
電話/〇七七三(二七)四四四七



# 賀 春

住 職 成 田 大 航

新春明けましておめでとうございます。

大雨と災害に見舞われた昨夏でした。土師においても、内水の氾濫で水に浸かったお家も三桁に至り、円覚寺も裏山の土砂崩れで危うく堂宇が押し潰されるところでした。また、直後の広島では多くの人命が失われ、更には御嶽山の噴火と、次々と自然の猛威にさらされた年となりました。

江戸時代の禅僧良寛さんは、文政十二年七十一才の年、越後三条で起きた大地震で、知人で造り酒屋の杜阜さんを案じて手紙を書きました。「災難に逢う時節には災難に逢うがよく候。死ぬる時節には死ぬがよく候。是はこれ災難をのがるる妙法にて候」とお見舞いの手紙を書いたという有名な話があります。あくまでも生死にかかわる時の究極の心構えで、軽々しい読み方では誤解してしまうかも知れません。

ここ何年も気になっていのですが、お葬式などでお別れの挨拶の中で必ず「天国」という言葉が使われます。この二十年ほどで日本人は死んでからの行き先が「あの世」

から「天国」に変わってしまいました。もしくは、はっきりとわからなくなったというのが本当なのでしょう。先が分からないので現在が不安になります。命のイメージを持つていかどうかは、今を生きるのにとっても大切なことだと思います。

近年、若い人にも巡礼ブームだそうです。日本人は古来から白装束に身を包み、念持仏を携えて霊場を巡る旅を千数百年にわたって続けてきました。白装束は死に装束、死後の旅を生きているうちに巡り、「あの世」彼の世（彼岸）のイメージをしつかりと心に刻んで心が迷わないように日々努力してきました。もしかしたら今の巡礼ブームは、気がつかないうちに、否、大切なことに気づいた人が段々と増えてきたということかもしれません。

新年早々、難しい話になってしまいました。本年も檀信徒各家、家門隆昌・家内安全あらんことをお祈りして新年のご挨拶といたします。



13教区秋季護持会総会にて

# 謹賀新年

## 新年のご挨拶

明けましておめでとございます。

檀信徒の皆様におかれましてはご健勝で新年をお迎えになったこととお慶び申し上げます。

日頃は圓覚寺護持会の運営にご理解とご協力をいただき厚くお礼申し上げます。総代の責務を無事務めることができました。本年もよろしくお願い申し上げます。

一昨年に続いての豪雨災害など大変な年となりました。被災された檀家の皆さんにお見舞いを申し上げます。

～一年を振り返って～

### 成田大航師徒弟宗寛様

#### 大本山永平寺へ上山

徒弟宗寛様が一昨年長松寺住職様の晋山式と結制入寺式で首座(しゅそ)となられ、僧侶の登竜門となる二番目の儀式を無事お勤めになり、めでたく駒沢大学を卒業後、大本山永平寺に上山を希望され、二月下旬、

代表総代 芦田正勝

修業僧として旅立ちの朝、凛とした雲水姿に身を固められた宗寛様に感動し、本堂前にて役員、梅花講員、友達、近隣の皆さんと激励、お見送り、圓覚寺を後に元気に出発されました。



### 土師墓地の環境整備と無縁墓地整備

墓地周辺環境整備は土師山林会のご協力をいただき完了いたしました。

墓地整備は圓覚寺歴代和尚様の墓所を整備(十一月から実施)した後、無縁墓地の整理改葬を順次実施して行く計画です。



### 福知山地方の八月豪雨と

#### 圓覚寺裏山土砂崩れ



お盆行事等が残る八月十六日から十七日にかけて福知山地方を襲い降り続いた雨は豪雨となり広範囲の地域で浸水・山崩れの被害が発生しました。

圓覚寺裏山も十七日未明に土砂崩れが発生、建物の近くまで流れてきておりましたが、幸い建物被害はなく安堵いたしました。現在、二次災害防止のため土留めの上、ブルーシートで覆い、今後の復旧対策を立てているところです。この復旧工事についてはお檀家皆様の温かいご支援におすがりする方法はありません。改めてご無理なお願いをさせていただきたいと考えております。どうか復旧にご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

今回の災害を教訓に建物等を安心して護持できる工事施工を考えております。





知ってほしい土師村の歴史

二〇〇年前 伊能忠敬土師村での測量のこと

佐古田 廣 文

正確に言えば二〇一年前の文化十一年（一八一四年）、江戸幕府の事業として日本全国を測量した伊能忠敬一行は、出石で二班に分かれ、土師村には二月十六日永井甚左衛門・今泉又兵衛等六名が宿泊した。一行には藩の役人や近隣の庄屋たちも加わったので、宿泊は円覚寺や庄屋宅など計四カ所に分宿した。

前日の十五日、土師村庄屋高橋勘左衛門は測量の便宜のため、村の概要を書いた「書き上げ帳」を提出した。それによれば土師村は、

高五五八石、家数一五九軒。そのうち本村に八四軒、枝郷新町が七五軒と説明し、村の大きさは東西七町五間（約八〇〇メートル）、南北一一町二五間（約一二五〇メートル）で、土師の集落は東西が一町二〇間（約一五〇メートル）、南北は二町（約二二〇メートル）と記した。

次いで街道について、大阪街道や京街道を説明し、村内を通る京街道は土師川渡場

から長田野村境側迄の一三町二四間（約一五〇〇メートル）で、その京街道の通りに土師の継場（宿場）があると書いた。

又、測量に参考となる遠山見渡には「鬼ヶ城」「神南山」「三岳山」の三山をあげ、それぞれの方角とおよその距離を書き、隣村の「堀村」「前田村」「長田村」についても同様に方角と距離を記した。

村内の神社について、神社は天満宮、寺は曹洞宗妙智山圓覚寺と書き、村の名所・旧跡・古城跡・名産品は無御座候（ござなくそうろう）とした。

食事の接待は、通達によれば有り合わせの品、一汁一菜で良しとのことであったが、庄屋勘左衛門は料理人門垣屋儀助の協力を得て一汁三菜とし、夜食も準備し精一杯の接待をした。

土師村の住民も道路の点検・清掃・補修に協力をした。

伊能忠敬等によって作成された日本全国は、シーボルト等によって遠くヨーロッパ

に伝えられ、当時のヨーロッパの有識者の間に日本人の観測及び測量技術が優れていることを認識させた。当時のヨーロッパの一流の地図に比べればいくつかの欠点もあるが、当時のアメリカの地図には何ら劣らぬ地図であった。

文化十一年の土師村の住民達の努力は、遠くヨーロッパにまで日本の良さを伝える結果につながったわけである。

今回使用した古文書は、土師高橋家文書「測量御役人御通行二付日記」である。



葺きの頃の圓覚寺本堂



# 福知山市仏教振興会主催

## 北陸の名刹、大安禅寺参拝の研修旅行に参加して

圓覚寺総代 伊東康雄



大安禅寺

新しい年の始まりに、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

昨年の仏教振興会の研修旅行は「生き生き法話」で有名な福知山市の大安禅寺（臨済宗妙心寺派）で法話を拝聴させて頂き、本格的な精進料理を堪能する研修でした。

十月十七日（金）朝六時三十分、福知山駅北口に集合。バス二台に分乗、昨年夏に敦賀まで全線開通した舞鶴若狭自動車道で一路敦賀へ、北陸自動車道へ乗り継ぎ福井へ。お寺に着き、頂いたお寺案内のしおりによりまずと約一三〇〇年前、時の高僧泰澄大

師が竜王山田谷寺を創建。天正二年、織田信長の越前攻略に遭い、兵火により焼失。その霊地に、万治元年（一六五八年）第四代福井藩主・松平光通公が祖先と両親への恩を忘れない為にと、越前松平家永代菩提所として建立と記されております。

参拝者一同、本堂に集合、お寺の説明を受けた後、時代の流れでしょうか、大スクリーンにてビデオ「正しい坐禅の作法」を受講後、法話が始まるとたちまち「爆笑の渦」。まるで奇席に来ている感じ。笑いを誘いながら論されたことは、私の解釈が間違っていないければ次のような教えだったと思います。

演壇の横に、「一に掃除、二に笑顔、三四元氣におかけさま」の掛け軸があり、この言葉について話を広げ仏教の教えを現代社会にあてはめ参拝者も巻き込みながら面白可笑しく爆笑の中での説法でした。

私なりの解釈は「心の中の雑念を払い清め寛容の精神で、人には優しい目と笑顔で



接し、心穏やかに生業に励めば多くの人々に支えられ、自分が生かされていることに感謝出来る」と解釈しましたが、そんな理解では「修行が足りぬ、カーツ」とお叱りを受けそうです。

さて、法話が終わり精進料理を頂きましたが、先ほどの法話と重ねてみますと料理がここに並ぶまでにはどの料理の品も多数の人々の苦勞の末に出来上がった料理だと思おうと感謝せずにはおられません。どの品もおいしく頂きました。

「こちそうさま」…合掌…正に、食事五観の偈の教えの通りです。

帰りは昔、越前で宿場としてもっとも繁栄し今も昔風の家屋が軒を連ね当時の宿場の面影をとどめる町並みの今庄宿と本陣跡・酒蔵や私たち一行がくるのでと地元の方々の特別な計らいで、独特の音頭で優雅な今庄羽根曾踊りを見せていただき帰途につきました。帰りのバスがガタゴトと揺れる度に本日頂いた有り難い教えが頭から一つ二つとこぼれ落ちたかも知れませんが、残った教えを守り「自分が生かされている」ことに感謝したいと思いま



今庄宿

す。



# 圓覚寺 点描

二月十五日 釈迦涅槃会

年に一度の大涅槃図をご開帳して、涅槃会をおつとめしました。



五月八日

花祭り

地元土師保育園の園児たちがたくさんお参りしてくれました。

お団子や甘茶をもらって帰りました。



九月二十日

秋彼岸

福知山市仏教会長、松林寺ご住職、中川昭徳老師にご法話を頂きました。



十三教区秋季護持会総会の開催



昨年の八月豪雨により当番寺院頼光寺(川北) 席裏山の土砂崩れにより本堂等に甚大な被害を受けられ、教区秋季護持会総会の開催が困難となり次当番の円覚寺がお引受けし、十三教区秋季護持会総会と併せ宗門最勝のご両祖忌法要をご寺院住職様のもと十二年ぶりに十月十日に開催されました。

当日は特別法話もあり静岡県島田市大髭寺住職特派教師稲石文乗老師から江川辰

三曹洞宗管長老師様の「告諭」(おことば)で「感謝の心が。布施である」と説いて講演して下さいました。緊張の中無事終了いたしました。

十二月十八日 山門大煤払い

大勢の方に  
お世話になりました。



除夜の鐘  
(大晦日)

一年の感謝の気持ちを込めて。



本堂長椅子供養

今年も芦田和昭様・木下操様・大槻勝巳様・足立智子様より長椅子の供養をいただきました。





# 御詠歌との出会い

圓覚寺梅花講員 伊東 昭子

福知山に住むようになり早四十年。この地で初めて御詠歌と出会いました。それまでは御詠歌を聞いたこともない私には何も興味を持っていませんでしたが、義母がいつも口ずさんでいたので自然と耳に入っていました。

新講員の募集があった時も、踏ん切りのつかなかった私に義母が「御詠歌はよいからやった方がええ」と背中を押され習うことになった訳ですが、当時の私にとってはまさかまさかの出来事でした。

義母は御詠歌が好きでした。大好きでした。練習日は早めに夕食をとり、きちっと身支度をして楽しそうにお寺に出かけていました。

そんな義母が十四年前に亡くなり、お通夜には講員の皆様がお唱えて下さいました。御詠歌の歌詞と歌声とチーンチーンと鳴る鐘の音が一つになり、それを聞いた時は何とも言いようのないものが胸に込み上げてきて自然に涙が頬をつたつてきました。あの時の感動は今でもはつきりと心に残っています。あとになって「御詠歌ってすごいなあ」と思ったものです。

お葬儀に御詠歌をお唱えさせて頂く時は、御家族の悲しみと亡くなられた方を思

いやり、心を込めてお唱えしなければと心掛けています。

私も御詠歌を習い始めて十数年になりました。なかなか上達しませんが、「継続は力なり」とか……この言葉を「モットー」としてこれからも日々精進していきたいと思っています。

梅花講の講員も大分少なくなってきました。お一人でも多くの方が御詠歌に親しんで頂ければ嬉しく思います。

## 梅花講「講員募集」のお知らせ

梅花流詠歌とは、単に歌の上手下手ということではなく、ご詠歌を通して心豊かな日々を暮らしましょうという、詠道に励むことを目的としています。

一、私達は梅花流詠歌を通して、

正しい信仰に生きます。

一、私達は梅花流詠歌を通して、

仲よい生活をいたします。

一、私達は梅花流詠歌を通して、

明るい世の中をつくりまします。

このお誓いを恒に心に抱きながら梅花流のご詠歌はあります。

昨年入構された新講員さんも少しずつお作法にも慣れ、新しく出会ったお友達とも和気あいあいと練習に励んでおられます。初めてでも全くご心配は入りません。お寺の静寂の雰囲気の中で、ご詠歌をお勤める機会を持ちませんか？ 尚、他の講には男の方も多数おられますので、男女問わずご参加をお待ちしております。

## 平成27年度 和経会主催の花まつり 土師新町南区で開催



平成二十七年四月二十九日(水) 和敬会(雀部地区、西中筋地区、佐賀地区の三区の寺院で構成)主催の花まつりを土師新町南区自治会のご理解、ご協力を賜り開催することになりました。

〔花まつり〕はお釈迦様のお誕生を祝する行事で、当日はお稚児さんによるお練り行列をおこないます。稚児に扮したお子様は諸天神が童子に姿を変えて導師をお守りする様を現したものと云われ、かしこく健やかに育つと言われておりますのでお子様の幸せな成長を願って、区民の皆様をはじめぜひ多くの方々のご参加をお待ちしております。